

集団における性格の形成



松 村 康 平

幼稚園教育研究集会が、東京と京都の二か所で行なわれまし
た。一九五四年（昭和二十九年）十月中旬のことです。

東京での主催（共催）は、文部省・東京都教育委員会・東京都
中央区と文京区の教育委員会と、お茶の水女子大学でした。期間
は四日間で、五班にわかれて集会がもたれました。第二日は、実
地保育で、第二班は港区の白金幼稚園が担当しました。

第二班の研究主題は、「性格教育はどのようにしたらよいか」
であり、これについて、集会の準備会でも集会の当初に討議が重
ねられ、次のような共通認識が成立して、第二班の研究は展開さ
れていきました。

「従来の性格指導、特に問題児の指導は、問題児その子だけ
目を奪われた個人指導が主であった。しかし、先天的な障害児・
精神薄弱児を別とすれば、指導によって解決可能な問題児とは、

その置かれた物的、人的な環境場面との関連の中に産みだされた
ものである。すなわちへ一般の幼児を対象として、幼児の発達の
状態を好ましい方向に高めるための好ましい流れ、この流れから
それるもの、これがここで扱われる問題児の概念である。」

このような認識にたつて、次のような問題提起がなされまし
た。

「問題児の原因は多くが家庭にある。とすれば、けっきょく個
人指導以外に方法がないのではないか」との声もあるが、すべて
の責を家庭教育に帰するのは、幼稚園・小学校の教育に携わる者
として、一種の逃避ともいえよう。家庭から問題を負ってきたに
せよ、その発現される場が幼稚園であれば、その集団への受け
いれ方を考え、他の集団成員を傷つけることなく、その対象児を
望ましい方向へ集団とともに向け換えていく努力こそ、教育者の

とるべき態度ではなからうか。」

この問題提起にこたえて、実際の研究主題は、「集団指導による性格教育」と決定しました。そして、第二班への参加者各自のもちよった問題と資料により、四つのグループが構成されました。そのなかの「問題児の集団指導」グループでは、基準を設けて資料の分類を行ない、研究を進めました。その主な基準は、次のようなものでした。

① 流れにのることができない。② 流れにのろうとしてもいれない。③ 流れにのることをしない。④ 流れのままにのせられていゝる。⑤ 流れのままにながされている。⑥ 流れにぶつかる。⑦ 流れから落とされる。⑧ 流れがくずされる(流れをくずす)。⑨ 流れがすむ(流れをすまず)。⑩ 流れが新しくつく(流れをつける)。

「流れ」については、全般として次のように理解されています。「幼稚園なり保育所なりでは、保育目標があり保育計画がたてられている。カリキュラムというのは、望ましい生き方のコースと考えられる。これは、また、生活に望ましい流れをつける道とも考えられる。はっきりしたカリキュラム(保育計画)をたてずに保育を進めている園でも、幼児の発達に即して、幼児の生活が望ましい方向をとるように、生活がより高まるように、努力しているでしょう。このようにしてつけられる園の生活の流れ」この流れからそれるものを問題児と、とらえています。(雑誌「幼

児の指導」へよいこのくに社)創刊号、昭和三十四年四月、参照)

この研究会を契機として、第二班参加者有志で「性格教育研究会」が結成されました。会員の所属する幼稚園・保育所を輪番会場に研究会がもたれ、実践活動を主体とする研究が進められました。(白金幼稚園での優れた集団指導の理論と実践は、海草子「幼児の生活と教育」(フレイベル館に、まとめられています)この研究会活動とほぼ同じころです。「大衆の中に心理劇場をたてる心理劇活動」が、はじめられていました。(筆者「心理劇」

〈誠信書房〉参照)

「心理劇では、そこに成立している対人関係が發展し、そのことにおいて、関係の担い手としての個人がのび、その個人のものゝることが、対人関係を發展させるといふ体験。その体験を豊富にすることができる方向へ、社会を變革していく。その意欲が、関係体験を通して育ち、それを実現する態度が、いまここで・新しくとれるようにする。」ここに、心理劇のねらいがあります。

心理劇(サイコドラマ)には、その主な基礎理論として、役割の理論と自発性の理論があります。役割の理論は、「性格教育研究会」における集団指導の研究に、役立つはずでした。自発性の理論は、従来の保育界における自由保育に、役立つはずでした。実際に、その研究会でもとりあげられ、保育界にも少しずつ浸透

していきました。そして、その理論は、じゅうぶんには認識されることなく、その技法は、じゅうぶんには体得されることなく、

性格教育研究会は、数年で活動をやめ、保育界では、「幼稚園教育要領」や視聴覚教育をめぐる問題などと結び、その理論と技法が、幼児の性格教育・集団指導・自由保育などを、全般として、推進するまでにはいたらずに、経過してきました。

心理劇およびそれと近似した理論と技法に関して、小・中学校教育では、事情がかなりちがいます。心理劇は、生活指導・特別教育活動に、とりいれられました。道徳教育では、その方法として「劇化」が、とりあげられました。劇化には、それまでの心理劇活動の成果が、とりいれられていました。また、学級経営や集団運営には、グループ・ダイナミックスの原理やソシオメトリーの方法が、とりいれられました。集団主義教育と学校心理劇とを関連づけることも、なされてきました。(学級心理劇については同名の宮本三郎著「新書館」があります。)

その間に、心理劇とそれに近似した理論と技法そのものの研究および発見が、行なわれてきました。関係理論(関係弁証法)が発展し、これを基礎とする理論的研究および実践的活動が、進められてきました。そのなかには、「幼稚園における望ましい活動」を認識し、その発展に役立てることのできる理論と技法、実践活動を数多く見出せます。そのなかから、いくつかとりあげて述べ

ましょう。

性格教育について

これを推進するには、「性格とはなにか」を明らかにすることが、有効です。性格と人格とは、どこがちがうのか。そういう「ことば」の吟味も、必要になってきます。そして、それは、幼児教育を推進するものであることが望まれます。事態は複雑であるなかで、ここには、大槻優子さんの「人格(パーソナリティ)」についての研究(一九六五年十二月)をとりあげましょう。

大槻さんは、この研究で、人間をどのような観点からとらえて、「人格」を明らかにしているでしょうか。

「人間は、〈人〉と〈人〉とをとりまく環境」との同時的な相互関係の中に(つまり〈状況〉に)位置づけられ、両者を統合する〈関係〉という観点で、把握される。

人間の活動は、意識過程と行動現象との統合体系である。(これを〈行為〉とよぶこともある。)

状況における個人に焦点をあてた〈人間の活動〉について、人格(パーソナリティ)という概念が用いられる。〈人格〉とは、状況において個人がどのような関係を成立させているかを、意味している。

人格とは、状況における個人の関係のしかたである。人間の活

動（行為の過程）に即していえば、その動機においては状況のどこにてがかりを求め、その経過においては状況にどのように参加し、その結果においては状況をどのように発展させたかの、統合体系である。

ここに、役割概念を導入すれば、人間の行為は、状況における役割行為であり、人格は、状況における個人の役割のはたし方として、説明できる。

ある個人の人格は、その個人をふくむ状況においてとらえられ、その個人だけをあらわすものではない。

人格は、發展的統一性および同一性をたもちながら、状況の変化に応じる可变的性質のものである。個人の〈独自性〉は、その個人の属する複雑な関連状況において、形成されるものである。」

集団指導について

「対人関係の物の機能の相互関係」「集団内の関係の成立のしかたと、その変化に対応する物の所有のしかた」などについては伊東詩子・石黒富貴子さんたちの研究があります。（筆者「心理遊戯療法」、雑誌「保育」昭和四十一年四月号から連載、参照）

「物の所有者と他の成員がどのような関係にあるとき、その物は共有物化するか」「どのような物を用意しておく、集団を形成するとき成員が対等関係になるか」「人と物がどのような関係

にあると、子どもは積極的にふるまうか」などにこたえる一連の研究が進んでいます。また、「児童集団指導研究会」が発足（昭和三十一年）、並木（吉田）紀子さんたちによって、集団技法の研究、現場の教育実践に展開している技法の開発が行なわれています。

自由保育について

自発性は、新しい事態に対処して、新しくふるまうことを可能にする性質です。サイコドラマの創始者モレノは、次のようにいっています。「創造の働きに宿っていた自発性は、育てることができて、そのままくわえてはおけない。それなのに、人びとが自然性を育てずにいるのは、経験や社会的学習の成果に安住しているからである。」

自発性は、いまここで、新しく発動している個体の情態である、ともいえます。それは、具体的場面（関係領域）に規定されてはたらく個体の情態であり、個体に備わっている性質とは違います。発展している研究、新しい理論や技法が、どのように保育を推進し、幼稚園の保育形態を変えていくものでしょうか。（坂元彦太郎「保育の要諦」、本誌昭和四十年十一月号参照）そのことに創造的変革者への道を歩む人たちのどのような組織化が、効果をもたらすのでしょうか。

（会場のみなさんともいっしょに、考えましょう。）